

派遣生徒 感想文集

魚沼市は平成21年に非核平和都市宣言を行いました。これに伴い、平成22年度から毎年8月6日に広島市で行われる「広島平和記念式典」に市内中学生を派遣しています。今年派遣された代表生徒6名が戦争・原爆・平和について、「広島」で感じてきたことを感想文にまとめました。

終戦から73年、もう一度「平和」について考える機会にしてみませんか。

魚沼市教育委員会

「まだ七十三年しか経っていない」

小出中学校 3年 星^{ほし}夏鈴^{かりん}

「七十三年前、今日と同じ月曜日の朝。」
広島市長が発した『平和宣言』の中にあつた重々しい言葉の数々が、まだ私の耳にはつきりと残っています。

私は今年、生まれて初めて平和記念式典に参列しました。式典では、広島市長をはじめとするたくさんの方々が演説を行いました。その中で、私が特に印象に残ったことがあります。それは、広島に原爆が投下された七十三年前の八月六日の様子を、演説を行った一人一人がとても鮮明に語っていたことです。原爆が投下された瞬間の様子。目もくらむような光。体中に火傷を負い、水を求める人々の様子。そのようなことを、まるで自分が実際に見ていたかのように、そして、つい昨日の出来事のように一人一人が語っていたのです。演説をしている方々の中には、子ども代表の小学校六年生の姿もありました。この代表の演説の内容もとても鮮明でした。聞いていて当時の広島の様子がありありと頭に浮かんでくるようでした。七十三年前の出来事にも直接目にしたわけでもないのに、なぜこんなにも鮮明に語れるのか。その答えは広島市長の演説の中にあつました。

広島市長は、「人類は歴史を忘れ、あるいは直視をやめたとき、再び重大な過ちを犯してしまう。だからこそ私達はヒロシマを継続して語り伝えなければならない。」と強い口調で語っていました。これが私の疑問の答えです。もう二度と、あの過ちをくり返してはならないという思いから、七十三年前の出来事がこれほど鮮明に語り継がれてきているの



広島平和記念式典当日の原爆ドーム

です。そして、これは途絶えさせてはいけな
い人類の「語りのリレー」だと私は思いまし
た。まだ、七十三年しか経っていないので
す。これから先、何十年、何百年先も未来は
あります。式典を通して、私は、その月日の
中で二度と過ちがくり返されぬよう、「語り
のリレー」の担い手の一人となり、原爆の恐
ろしさを伝えていこうと決意しました。それ
を実行するために、まずは自分の身の回りの
家族や学校の仲間などから広島派遣で見聞き
したこと・学んだことを伝えていきます。

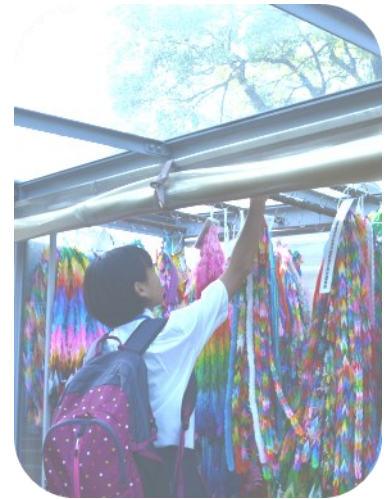
「被爆市民、戦争体験者の心を若い世代に伝えよう」と書かれた平和記念資料館の壁。実際に被爆した学生服、タオル、本。八時十五分で止まった時計。粉々になったレンガが落ちていて、今にも崩れそうな原爆ドーム。国籍関係なく涙を流しながら千羽鶴を奉納する人々。

私はこれらの実物や写真、平和を祈っている人々の姿を見て、三つの立場からの思いを学ぶことができました。

一つ目は、被爆者の思いです。被爆者は、戦争のせいで病気やケガに苦しめられました。でも、多くの人は生きることがあきらめずに、前を向いて助け合っていました。その力強い姿から、二度と同じ過ちを繰り返さないでほしい、繰り返ししたくないという強い思いと共に、自分たちが被爆したという事実を忘れないでほしいという思いを感じました。

感じた思いと伝える思い

堀之内中学校 2年 上村 星来 かみむら せいらい



原爆の子の像へ折り鶴を奉納



平和記念式典終了後、原爆ドームを前に

二つ目は、外国の方の思いです。広島に行くまでは、外国の方は、日本の過去のことには興味がないのではないかと思っていましたが、大間違いでした。被爆者の願いを大切に思い、深々と頭を下げて祈る姿をたくさん見ました。その姿から、世界全体の平和を願う思いを感じました。

三つ目は、私たち日本人の思いです。日本はたった一つの被爆国として少しずつ前進しています。今までの広島や日本の平和への取り組みから、伝え続けたいという思いを感じました。そして私も伝えたいと思いました。

広島を訪問した三日間は、平和について考える貴重な期間でした。今私にできることは、一人でも多くの人に三日間で学んだ内容を伝えることと、命を大切にすることだと思います。だから私は、友達や身近な人同士で助け合いたいと思います。

魚沼市非核平和都市宣言

世界の恒久平和と安全確保は私たち人類共通の願いです。広島、長崎の惨禍による被爆者をはじめ、諸国民の核兵器廃絶の切なる願いにもかかわらず、核の拡散や使用の危険性は高まり、人類の破滅を招く核戦争さえ危惧されています。

私たちは、先人から受け継いだ緑豊かな自然と貴重な財産を次世代に引き継ぐ歴史的な使命と、世界唯一の被爆国民として平和憲法の理念を遵守し、非核平和を実現する責務があります。

魚沼市は、非核三原則の遵守と核兵器の廃絶を求め、世界の恒久平和維持への願いを込め、ここに「非核平和都市」を宣言します。

平成30年8月25日(土)堀之内公民館大ホールにてうおぬま市民大学講演会の第2部として、「広島平和記念式典派遣中学生による報告会」が行われました。6名の派遣生徒それぞれが、現地目で耳で心で感じてきた戦争・原爆・平和について市民の方々へ「伝える」ことを意識して発表いたしました。当日は多数の方にご来場いただきありがとうございました。

7月に広島県を含む西日本の広い地域を襲った豪雨災害により、現在も復旧作業が続いています。被害に遭われた方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げ、一日も早い復興をお祈りいたします。

魚沼市教育委員会 生涯学習課



被爆者の思い

入広瀬中学校 3年

佐藤 美沙 さとう みさ

一九四五年八月六日午前八時十五分。広島に原子爆弾が投下されました。

私たちに被爆体験を話してくださいとくださった佐渡郁子さんは八歳のときに、祖母の家で被爆しました。妹と庭で遊んでいたとき、爆風と熱線が郁子さんと妹を襲いました。吹き飛ばされた郁子さんは祖母に見つけられ東練兵場まで逃げました。妹は大やけどを負っていて今すぐにでも薬が必要です。しかし、薬はもらえませんでした。「水を飲むと死ぬ」と言われた郁子さんは、鉄道草をしぼって飲みました。水を飲んでしまった人は本当に死んでしまい、逃げてくる間にも防火用水路に頭を入れたまま亡くなっていく人、川の水を求め川で亡くなった人がたくさんいたそうです。その後、郁子さんは家族を全員亡くし、親戚めぐりをしました。そのたびに転校し、原子爆弾の影響で髪が抜けた郁子さんはいじめにいました。原子爆弾のせいでも、何も悪くない人が苦しまなければならない。本当に悲しいことだと思いました。

原子爆弾投下から今年で七十三年が経ちました。被爆した方々の平均年齢は八十二歳と高齢化し、被爆体験で伝える方々も年々減少してきています。郁子さんは、「これからは若者が伝えて欲しい。戦争反対、核兵器廃絶を願うばかり。」とおっしゃっていました。世界にはまだ核兵器を所有している国があります。世界から核兵器がなくなり、戦争もなくなる本当の平和が訪れる日が一日も早く来ることを心から願っています。

私はもう二度と原子爆弾を使ってはならない

被爆者体験講話の様子



いと伝えたいです。そして、毎日の生活で不自由なく過ごさせていることに感謝し、生きていきたいです。



広島平和記念式典会場にて

平和記念式典に参加して

広神中学校 3年

五十嵐 捺紀 いからし なつき

私は、広島派遣事業を通して広島平和記念式典に参加させていただきました。式典では、安倍内閣総理大臣や広島県知事をはじめとするたくさんの方々があいさつをされました。その中で心に残っている言葉があります。

一つ目は、広島市長の平和宣言の中で紹介された「過去のことだとして忘却や風化させ

てしまうことがあっては絶対にならない。」という被爆者の言葉です。その話を聞いている途中に涙を流している方がいました。その様子を見て私は原子爆弾の恐ろしさや、人々の苦しみを感じる事ができました。そして、広島で起こったことは決して忘れてはいけないと思いました。

二つ目は、子ども代表の平和への誓いで紹介された「平和とは、自然に笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」という言葉です。私はこれまで戦争がなければ平和だと思っていました。しかし、この言葉から、戦争がないだけでは本当の平和ではないと気づくことができ、「笑顔」「幸せ」「未来」があることが本当の意味で平和であると感ずることができました。

広島市に原子爆弾が投下された八月六日八時十五分に黙とうが捧げられました。そのとき私には、会場にいる全員が戦争により被害に遭われた方々に哀悼の意を表し、世界の平和を実現すると誓っているように感じました。

式典に参加し、貴重な体験をさせていただきました。世界中のたくさんの方々が式典に参加していたり、鶴を折っていたりして世界の平和を願っていることがよく分かりました。

広島派遣事業を通して被爆者体験講話や資料館の見学をして、命の大切さ、平和の大切さについて改めて感じる事ができました。これからは、学んだことを多くの方に知ってもらうために、戦争の恐ろしさや、平和について伝えていきたいです。

平和に向けて

湯之谷中学校 2年

須佐 珠美 すき たまみ

私は広島派遣事業に参加して、原爆の恐ろしさや被爆した人々が受けた苦しみを肌で感じる事ができました。そして核兵器のない平和な世界にしなければならぬと強く願うようになりました。平和記念資料館を見学した時、強く印象に残った物が一つあります。

一つは『母が愛用していたはさみ』です。被爆後、自宅の焼け跡から母の白骨と一緒に出てきたのだそうです。やっと帰った家に母がいない。もう二度と会えない。それまでの日常はもう戻らないという気持ちを想像すると胸が痛みました。

もう一つは佐々木禎子さんが折った折鶴です。禎子さんは二歳の時に被爆し、九年後に白血病を発症しました。禎子さんは、早く元気になって友達に会いたい、夢である体育の先生、歌手になりたいと思っていたそうです。その時、お年寄りから折鶴を折ると病気が良くなると教えてもらい、折鶴を折り始めました。しかし願いは叶わず、闘病生活が始まって八ヶ月たった頃亡くなりました。

私は禎子さんが折った約千五百羽の折鶴を見て、きっと禎子さんは夢や願いが叶わず、無念だったのではないかと思いました。そして、人々の日常を一瞬で奪った原爆の残酷さを強く感じました。また、被爆された方からお話を聞き、七十三年たった今でも原爆による放射線の被害に苦しんでいる方がたくさんいることを知り、戦争はまだ終わっていないのだと思いました。

私たちが世界遺産に登録されている原爆ドーム周辺を訪れた時、外国の方を多く見か

けました。世界中の人々が原爆に関心をもち、戦争や平和について真剣に考えていることもわかりました。私も原爆投下によるたくさんの方の悲劇を決して忘れず、これを被爆者の方の思いとともに、私の周りにいる人たちに伝えていきたいです。



原爆の子の像の前にて

悲惨さを物語る被爆者の言葉

守門中学校 3年 高橋 悠牙 たかはし ゆうご

「みんな黒焦げになって死んだ。」これは、今回の被爆者体験講話をしてくださった、佐渡郁子さんの言葉です。

佐渡郁子さんは、八歳の時に、おばあちゃんの家において、一歳半の妹と一緒に被爆しました。突然目の前に強烈な光が見え、三千度を超える熱線で体をやけどを負い、爆風で吹き飛ばされました。佐渡さんは意識を失い、避難所で目を覚ましました。その原爆のすさまじい威力で、妹、両親を含め七人の身内の方を亡くしました。

原爆で家族と家を失った佐渡さんは、しばらく親戚の家で生活をしていましたが、その

後、様々な場所を転々としたそうです。そのため、多いときには、半年で四回も学校が変わったそうです。私が佐渡さんの立場だったら、学校が変わり何も知らないところに行くなんて考えられません。しかも、半年で四回も・・・

そして、佐渡さんはお話の最後に、「戦争は二度としたくない。」とおっしゃっていました。私もまさにその通りだと思いました。原爆というたった一つの兵器によって、多くのものが破壊されました。それは、人の命と建造物や自然はもちろんです。「世界の平和」。原爆は本当に恐ろしいもので、絶対に使用してはいけないんだ。ということが改めて分かりました。

原爆の悲惨さは、過去のものではありません。今も、被爆された方々の苦しみは続いています。その方々から生まれた被爆二世、三世の人々も差別や放射線による遺伝被害の恐怖に怯えて生活していることを知りました。そして、現在世界中には一万発を超える核兵器が存在し、現在と未来の人類の生存を脅かしています。

佐渡さんは、「この悲惨さを、あなたたち若者が未来へ伝えてほしい。」とおっしゃいました。私は、被爆者の方から直接聞いたこの言葉を胸に、少しでも世界が平和になるように努力をしつづけていきたいと思えます。世界のために、日本のために。そして、今この世界を生きる私たち人類のため

